

春霞楼・鶴亭秀賀の都々逸本端唄本

菊池真一

一 鶴亭秀賀の唄本

鶴亭秀賀は、人情本・合巻などの読み物の作者として知られているが、唄本作者としては全く知られていない。

日本古籍総合目録で「秀賀」を検索すると、三十一本の著作が出てくるが、唄本は『はないかだ（はないかだえらみもんく）』のみである。しかし、同書の鶴亭秀賀の序文を見ると、「好者に視せんと文廼舎主人の物せられし此一綴に序文を書よと僕に託され」とあるので、『はないかだ』の作者は文廼舎主人であって、秀賀は序文を書いただけであることがわかる。

筆者は日本古籍総合目録未掲載の秀賀作唄本二点合一冊を所有している。

『都度逸初音集』

『端唄秋の草』

辻占研究家・青木元氏は、次の本を二部御所蔵である。

『辻占端唄』と『大よせ』（内は角書）以上三点が、鶴亭秀賀作の都々逸本・端唄本である。

倉田喜弘氏は、その論文「萩原乙彦の歌謡書」（『日本歌謡研究』九号。一九七〇年）において、次のように述べている。

ところで、江戸末期に流行した大津絵、都々一、端唄などの唄本には、戯作者も多く筆を染めている。管見に従えば、嘉永六年には竹葉舎金瓶の『沓かむり五十二次ゑらみど』、翌七年には仮名垣魯文の『辻宇良都々逸』、松竹舎椋彦の『新板葉うたつくし』。そのほか為永春水、福亭三笑、万亭応賀、梅素亭玄魚、文廼屋仲丸、柳亭種彦、武田交来、梅亭金鷲などを挙げる事ができる。しかし魯文と金鷲の約十冊づつを除くと、他はすべて一、二冊である。

今まで、鶴亭秀賀の唄本について論じた人はなく、本論文資料は初めてのものと言うことができず。

三点の唄本について、翻刻紹介する。「辻占唄」と「大よせ」の翻刻にあたっては、青木元氏の許諾をいただいた。厚く御礼申し上げます。

二 『都度逸初音集』

菊池蔵『都度逸初音集』は、表紙に「式へむ」とあるが、中身は一編・式編合冊である。「端唄秋の草」一・二編をも合冊している。

都度逸初音集

式へむ

鶴亭作

一 鶯齋画

錦橋堂板「(表紙)

独度逸はつ音集「(見返し)

古今集の序に。歌は人の種として。万の言葉とはなれりと言ひ。然ば歌迎唄成とて。同種うたなる花菖蒲。黒白も分ぬ浮恋も心を種の口号なり。夫よりズツト短文句なるは。天明頃の好此今の都々逸。ドツト微笑る文句あれば。又身に染々と想当

て。思ひを千里の月に嘯く。嗚呼度々の徳たるや。一言に千万の情を含み。忽ち男女の中も和らぐ。夫歌にも知ざらめやは。

鶴亭秀賀戯述「(一才)

あへばはなしも口へは出ぬ帰しちやあとでじれてある

手活のはなにしようといへば水のさし人がとかくある

着せる羽おりのゑりさき見ればかへりのよいもはらがたつ「(一ウ)

までどこぬ夜はともし火さへ(も?)消も入たきわがおもひ

ういたおかたとわしやしら浪の人にこころをおきつ船

打ば音が出る釣鐘とても金といふ字がものをいふ「(二才)

三味せんの胸で辛ぼうする気になれば金は花林と紫檀棹

いはにや私のこころがすまぬにこるおまへのこゝろいき

わしが心はひらかぬけれど咲たうはさは菊のはな「(二ウ)

一声ないたでつい目をさます闇のからすが気をもませ

こころ隅田の川水さへも恋にや涙の雨にこり

じれつたいとて子供にまじりきさごはじきの八ツ
あたり」(三才)
恋の奴とわしやなるからにや浮名の供にたてばた
て
日々恋しさ増穂のすゝきほに出てしれたらなん
とせう
重まいぞや単の衣うらない契りじやないかいな」
(三ウ)
さきのきれたる筭じやないがはかなき身とはわし
が事
相生といふはうれしい名にありながら松といふ字
はきくもいや
わたしがいやならこの川かみに橋があるからまい
らんせ」(四才)
おもふまいとはおもふて見ても思ひだしてはます
おもひ
将棋じやなければどこまつたものよさしてゆくべき
当もない
恋の重荷は背負てもたてぬおもひおもひの胸のう
ち」(四ウ)
水くさいぬしの心とわしやしらなんだ塩だちした
のも口をしい
十露盤の玉にあふのになぜ眠からふわたしやあけ
までねづみざん
ことのたらんもかへつてうれし二人根岸のわびず

まる」(五才)
いつそそはれざ目をなきつぶし見ずは恋しと思ふ
まい
たとへ今ではかた思ひでもすゑにやしつくり鮑貝
なぜかおまへの気は水あさぎわたしや深くもおも
ひ染」(五ウ)
二ツならべし比翼のまくら間夫と客との陰日向
名ごりをしいがこりや是ぎりよあだなうき名のた
ゝぬうち
いなならいやだとひらたくいひなしかしこゝろは
丸がよい」(六才)
人は何とも岩間のつゝじ日陰のはなじやないかい
な
たとへ三すぢに世はわたるとて心一トすぢぬしは
かり
三味せんのどうなるものぞもつれた末にや切たい
とならかけかへる」(六ウ)
たき付られるとわしや知りながら胸のほのほに
えかへる
なんにもしら齒と思ひのほか年増もおよばぬ恋
のちゑ
転寝(ごろね)は承知であがれといふて餅ぐわし
とれとは気がおもい」(七才)
たれを待むし音は鈴むしよこゝろつくしの琴の聲
日かげまつ間の朝がほさへもみづにはなれていぬ

わいな
口さきでわざとけなして心のうちはむねでのろけてあるかいな」(七ウ)
そでを引れりやまづ気がひける蝉の羽ごろも夏羽あり
こゑはなしてもお顔は見へぬくも間がくれのほとぎす
ふたりつくづくかゞみにむかひかうもやつれるものかいな」(八オ)
糸にまかせしわが身でさへも引にひかれぬこひのいぢ
ぬしもたいがいさつしておくれ浮気らしいも家業づく
人は花見てよろこぶけれどわたしやものいふはながい」(八ウ)
いはんはいふには増とはいへどいはずにや心がひらかない
独くよくよあんじる胸へ癩がさしこむ窓の月
しのぶ恋路のくらやみ峠てらすはぬしの笑ひ顔」(九オ)
明のかねをばつくづくかぞへアレサじれつたい夜があける
そんなに顔を見つめちやいやよあいそがつきたらなんとせう
涙ふくにも笑ふも口へとかくはなれぬ嫁の袖」(九

ウ)
毒と知りつつ冷酒のめば胸にたく火で爛ができ
四ツ谷ではじめてあふたが縁でいまぢやしだいに
鞠町
はるの雨とてつい手まくらにぬれてほころぶ山ざくら」(十オ)
ひなのやうなるはこいりむすめむしがついたらなんとせう
私も待そうこゝろはないが首尾のできぬは是非がない
のぼりつめたる二かいのはしごとんと我身でわからない」(十ウ)
《菊池注：ここまでが「初音集 一」で、次の十丁が「初音集 二」と思われる》
都々一
つがひはなれぬおしどりさえもしばしわかるるあさあらし
春霞楼主人
鶴亭秀賀」(一オ)
雨がふるのもわたしはうれしけふは流しときめなまし
うそにほれたといはれるものかうたぐりぶかいもほどがある
人ははつ音とよろこぶけれどうぐひすよりもぬしのこゑ」(一ウ)

二丁目欠か

わしがいふ事少しはききな取てくはふといははせぬ

誠あるぬしが空言こそわたしはうれしおもはぬお
かたのまことより

凧じやなけれど切たるあとでおもひいだせばきにかかる」(三才)

恋が浮世かうきよがこひか恋でうきよはもつたもの

宵のさはぎもわしやうはの空月をながめてまつて
ゐた

せうちしながらつひ待わびて思はぬ口舌もほれた
情」(三才)

余り寒さに股火をしたらむねきにはねた桜炭
鳥のそらねをして見たけれど人めの関はゆるしや

せぬ
にくらしいほど可愛眼つきこれがほれずにいられ
うか」(四才)

奴唄さへ切たるあとはなにかねぎめのよからうぞ
兎角世間は栲がにやならぬ奴だこさへ水をくむ

素足まゐりの爪さきさへもおもひつめたき雪の夜」
(四才)

宵にかへれといふたはうそよたとへ死でもかへし
やせぬ

おほこおぼこにつひだまされていままですられた

二本棹

おつにからまる風野のすすきとくにとかれぬむね
のあや」(五才)

指をきるのはいとひはせねど二人のなかはきりは
せぬ

わたしの思ひは井戸よりふかい少しはこころをく
ましやんせ

粹な小梅も恋には胸にけむりのたへぬ瓦やき」(五
才)

後家と火鉢にや皆手を出してあつて見るも人ごこ
ろ

思ひのたけをいはんとすればさきのこころにふし
がある

可愛がられりや猶つきあがりすねて見せたる庭の
松」(六才)

雛のやうなるあの小娘にむしがついたらなんとせ
う

月がかさなりながれたときにやしんに女房はかな
しがり

損な心とわしやしらなんで徳からほれてみたわい
な」(六才)

人をのろはば二ツのあなよもとは一ツの穴にへに
あれ見にな非情の瀬戸ものさへもわれるまへには

声がはり
ぬしは浮浪わしや笠舟のなかにこがれてゐるわい

な」(七才)
 怪我したはなしはきかないけれどときどころぶ
 あのむすめ
 今戸やきなるあねさんさへもいつかわられること
 がある
 近所ぢうではちやにするけれど平気なはづよ困ひ
 もの」(七ウ)
 下戸が箸とりや肴をあらすこれがあらしの桜鯛
 神の御罰かわしやおそろしいなにしにうそをつく
 まなべ
 蝶や衛と化るもはづよもとは河津のふたりの子」
 (八才)
 頃も弥生の汐干に行ば内の苦勞もわすれ貝
 この身ばかりか巻紙さへもやるせ苦界のもん日ま
 へ
 わしがこころはこのしら糸よこころしだいにそめ
 なんし」(八ウ)
 世帯じみてもどこやらしやれる廓のことばの一ツ
 癖
 なんぼなんでもきられるものかそでないしかたの
 陣羽おり
 おもひ立田の八塩のもみぢそめてうれしき神無月」
 (九才)
 おやのやまひの薬のしろにせんじつめたるわがか
 らだ

したいから汗をながしてくどいてゐるにおまへは
 それをききながし
 あれさじれつてへこの手をあげてじつとかうしに
 ゐなましよ」(九ウ)
 はるがなくなりやだんだんあつくなるみ絞りのひ
 とへもの
 貧をするゆへいづくへゐても人にきがねがたと
 ある
 ひんすりやどんすをきてねる娘運か不運かさてう
 んか」(十才)
 おま一人りでもふいくのかときうりきりても母の
 じひ
 一トすじに思ひこんでは千筋の縄でしばられやう
 が身のかくご
 いましめの縄はきれても二人のなかはここへしん
 でもきればせぬ
 鶴亭秀賀作」(十ウ)

三 『端唄秋の草』

(安政六年刊)

『都度逸初音集 式へむ』の表紙の元、『都度逸
 初音集』と共に『端唄秋の草』初編・二編が綴じ
 られている。

端歌秋の草初編はしがき

夫頻迦の妙音は菩提を勧め。芸者の妙音は遊客に酒をすすむ。并は仏門是は大門。現世未来と替はすれど。同上品無苦世界歌舞の菩薩の微妙の声は。

梁上に燕飛で水中には魚跳る。唱歌は清和の時に随つて移る。于粵書肆錦橋堂の主人。近頃流行の端歌てふ俗称唱歌の数々を集め。猶新文句を案じ附録せし(一才)よと。僕に託すれば。ヲツト承知と毫を採。一夜に案稿三国一。世間穿の奇奇妙妙古今端歌の冠たりと。出放題を言散し。催促の小僧を一驚さしてかえしぬ。是ぞ所謂烟水練。大海知らぬ蛙の片歌。調子にあはぬと悪評なく。愛翫あらせ玉へと願はべるになん。

安政五年夏稿成同六末初春新刻

鶴亭の主人秀賀述(一ウ)

(はる雨かえ哥)

肌寒く夜もしんしんと更行ば。かすかに聞ゆ爪弾の唄につまされなさけなや。勤めの身でも一トすじにほれた心の氣の一ツさきじやさほどに思はねどわたしや氣がもめ身ままにならぬゆへサアじれつたいではないかいな(二才)

(もとうた)

(三下り) かわいかわいとなくむしよりもなかめほたるが身をこがすなんのいんぐわで実なきしん

をあかしてアアくやし

(かへうた)

かたいたたいとおもひのほかにかいおかたがありながらそんな心の浮気な人にまことあかしてアアくやし(二ウ)

(もとうた)

鳥かげに鼠なきしてまつかひもなく思はぬかたに一ト夜をあかすそれもつとめのならひじやけれどゑゑじれつたい苦の世界

(かへうた)

ゆめにだに主の名をよびつひわらひごへ傍輩衆におどろかされて夫と心はついてはゐれどゑゑじれつたいゆめかいな(三才)

(もとうた)

(本てうし) 宇治は茶所さまさまや中にうはさの大吉山と人の氣にあふ水にあふ色も香もあるすいたどしすいな浮世にやぼらしいこちやこをちや濃茶の中じやいな

(かへうた)

ここは名所飛鳥の山そらに霞の網ひきそめて風に氣をおく咲花の色も香もある八重桜さけば雲かやちれば又こちやゆきにもまがふじやないかいな

(三ウ)

(もとうた)

(本てうし) こひしゆかしがついしやくとなりむ

ねにさしこむまどの月今やくるかとまつ身はしら
で待ぬ一トこゑほととぎす

(かへうた)

こうしぎりとはついおもへどもかほ見てすぐにか
へらりよかたとへ鍋釜うりしろなしてあすからこ
まるもいとやせぬ」(四才)

(もとうた)

(本てうし) くれてゆかしき仲の丁心もほそきと
もし火やのきばにならぶとうろうのぱつときえて
はあれひけすぎのつめびきや

(かへうた)

すねてかへしてそのあとは心もほんにあらけなや
しらぬ禿にすねて見てはつとなきだしまたわらひ
だすくるわしや」(四ウ)

(もとうた)

(本てうし) ひとことが十ことにむかふうれしさ
はわすらりよものかわすられぬうそにはほれたを
実にしてゑゑくらすへ

(かへうた)

ひとごとにおもひしこともいまは身に恋しといを
かなつかしややるせないほどゆかしうてゑゑまま
ならぬ」(五才)

(もとうた)

(三下り) これとまらんせとまらんせつゆの情と
袖引とめてたたく格子にもたれてかかるゑゑいや

らしいこれなんのいとふりきる袂に名残をおしむ
飛脚忠兵衛と名も高砂の尾上のかねとつくづくど
ふかこふかいのとひぞりをやめて一ト夜サニタよ
さはたれもないこといふたよさこわい旦那はんじ
やとかたほで笑ふたへぬゆききのひま行こまにつ
いのせられし仇まくらつきぬゑにし千代の古道」

(五ウ)

(かへうた)

あれまたしやんせまたしやんせわしも一所とかけ
だしゆけば雲やかすみのすがたをかくすゑゑ情な
いこりやなんとしよとふりきるばかりに声はりあ
げてよべどさけべどそらふく風のおとのみたかき
タぐれどきねぐらへかへるとりの声一トこゑニタ
こゑはうつつできいてめざめてはあれさおかし
みんな夢であつたかとうれしいにつけかなしいつ
けさきだつものは涙にてつきぬゑにしやいろの世
の中」(六才)

(もとうた)

(三下り) やなぎやなぎで世をおもしろふうけて
くらすが命のくすり梅にしたがひ桜になびくその
日その日の風しだいうそも誠もぎりもなしはじめ
はすいに思へども日ましにほれてついでちになる
ひるねるほどのうき思ひどふしたひよりのひやう
たんであだはらのたつ人じやへ」(六ウ)

(かへうた)

恋し恋しで夜をはかなくもないてあかせしとこの
うちかねにおどろきからすにあける袖はなみだか
朝のつゆ有明のこるともしびのかけにもわかるひ
とりねのまくらはニツならべておいてまつほどつ
らきものはないどふしたことのしゆびだやらあん
まりきのない人じゃへ」(七才)

(もとうた)

(三下り) 浮草はしあんのほかのさそふ水恋がう
き世かうきよが恋かちよつと聞たい松の風とへど
こたへも山ほととぎす月やはものをやるせなやし
やくにうれしき男のちからじつと手に手をなんに
もいはずふたりしてつるかやのひも」(七ウ)

秋草は桔梗かるかやおみなへしくずがうらみかう
らみが葛かちよつとききたい恋の風とへどこたへ
もなみだのしづくつゆにはいろをまますものかじ
つにしんきな宮城野すすき萩のはな妻風にもなび
くうは気せうではないかいな」(八才)

河竹のうきなを流す鳥さへも番はなれぬおしどり
の中にたつつきすごすごとわかれのつらさに袖ぬ
れてかはおもなくあけがらす

(かへうた)

妹背山うきみやつすひなどりの恋しんしんの山
と山中をながるよしの川かほ見るばかりでそは
れぬつらさほんにおもひはますばかり」(八ウ)

(もとうた)

はるのゆふべの手枕にしつぽりとふる軒の雨ぬれ
てほころぶ山ざくらはながとりもつえんかいな
さきの心のあき風にほろりとこぼす袖の露ぬれて
くやしき今となり神がうらみであるはいな」(九才)

(もとうた)

(本てうし) 雪はともへにふりしきる屏風が恋の
中だちに蝶と衛の三ツぶとんもと木にかへるねぐ
ら鳥まだ口あをいじやないかいな

花にさそはれすみだ川すだれは恋の中じきりあだ
なちぎりのふねの内命にかへる一トことはあれむ
つましいではないかいな」(九ウ)

(もとうた)

(本てうし) おたがいにふかくしづみし恋がふち
せきにせかれてあふせはまれに忍びあふ夜のうれ
しさは一ト夜を千世の夢見ぐさはかない中じやな
いかいな

(かへうた)

隅田の里雪にふぜいの夕げしき冬も桜に花さきそ
めてねぐらもとむる村鳥一ト夜をどこに明さんと
迷ふもむりじやないわいな」(十才)

月かげにうつす姿のゑゑにくらしいおぼる夜にび
んかきなでてものおもふかうもやつれるものかい
な

(かへうた)

たまたまにあふをおまへはゑゑ

ぐちばかりふくる夜にしだいにさむきとこのうち
じつとよりそふふかい中」(十ウ)

《菊池注：以下『端歌秋の草』二編》

わかぬ浦にはめいしよがござる一にこんげん二に
玉津嶋三にさがり松四に塩はまよあまのはし立き
れとのもんじゆ文珠算さんはよけれどきれるとい
ふ字が気にかかるさつきにんとせうかどせうぞい
な」(一オ)

(もとうた)

(本てうし) うきな立じと口さきでわざとけなし
てあるときはむねでのろけてしらぬかほうはさす
るさへならぬとはほんにうるさい人のくち

(かへうた)

までどこぬ夜をなきあかすあかりの火さへきんぎ
んにほそる思ひの涙川あんじすごしをするときは
ほんにくらうになるわいな」(一ウ)

きん時がきん時が熊をふまへてまさかりよもつて
ふじやすそのの松ばやしよしつねべんけい渡辺の
つなからの大将あやまらせじんぐう后宮武内の臣
いくさ人形よしあしちまきしやうぶがたなやあや
めぐさやね船がやね船が雪をみんとてすみだ川さ
しておせや櫓びやうしやつしつしつぽり大よい
首尾の松まつといふ字がきにくはぬまたのやくそ
くついうそのかはぬしは水せううはきなはづよ心
一つ

ツがういてゐる」(二オ)

らくは苦のたねくは楽のたねしわんぼうが柿のた
ねあぶらがなたねわたのたねこめになるのがもみ
のたねややすい人参ありやおたね天まんぐうのお
まもりや梅のたねおつな事がはにしのたねくぜつ
がちわのたねふたりしてとる人のたね」(二ウ)

とかく世はかねふくとくのかねしわんぼうがため
たかね涙がでるかねただの米にかはるがかせぐか
ねきらいの人のないおかね神仏のまもりよりきく
がかねおやこのなかもわたしのかねじせつがくる
とふへるかね利そくのたまるかしたかね」(三オ)

(もとうた)

(二上り) はる雨にしつぽりぬるる鶯の羽かぜに
匂ふ梅が香にたはむれしほらしや小鳥でさへも一
トすぢにねぐらさだむる気は一ツわたしや鶯ぬし
はむめやがてきま身ままになるならばサア鶯宿
梅じやないかいなサアサなんでもよいわいな」(四
ウ)

(かへうた)

雪の夜にこたつのうちのむつごとはおもへばあつ
きこひなりや水も洩さぬちぎりとてつもりし胸を
うちあけて咄すも今は隔なく私やうれしいゆめか
いなやがて手足がさはりてこれからはサアといて
結ばん縁の糸サアサなんでもよいわいな」(五オ)

(もとうた)

(本てうし)むつとしてかへれば門の青柳にくも
りしむねをはる雨の又はれてゆく月のかげならば
おぼろにしてほしや

(かへうた)

そつとしておかねばはやすその角に思ひをこがす
胸の火のいつきへぬらんわがつまのさらばうらみ
んさてうしや(五ウ)

(もとうた)

(本てうし)心をば白がみにかく筆のさき毛ほど
おもはぬ主さんになほますかがみくもらんといふ
たがむりじやないかいな

(かへうた)桜ばなひらかぬうちをいろのなぞか
けてもとかぬ下紐の閑路ただやふこひのやみなこ
そながるじやないかいな(六才)

(もとうた)

(本てうし)四方に霞のたな引てほころび出し梅
が枝にまだ鶯の片言まじり残んの雪もむらなく消
て野辺にわかくさもへ出る風がもてくる梅が香ゆ
かし心うきたつはるげしき

(かへうた)棚に恵方の神祭りそなへし御酒も夫
婦づれ男てふめてふにあらねども残んの酒をてう
しにうつしすぐにかための盃は神がとりもつえん
うれしこころたのしのはるのよひ(六ウ)

(もとうた)

(本てうし)露は尾花とねたといふをばなはつゆ

とねぬといふアレねたといふねぬといふ尾花が穂
に出てあらはれた

松は柳の風しらず柳は松の雪しらずアレつもるゆ
きふくは風恋路のつもるをふくもかぜ(七才)

(もとうた)

(本てうし)はぎ桔梗なかにたまづさしのばせて
月は野ずゑにくさのつゆ君をまつむし夜ごとにす
だく更

ゆくかぜに雁のこゑはかうしたものかいな(八ウ)

(かへうた)恋衣きつつなれにし川竹のながれの
身とてよるべなく君をまつほの浦にすむあまりく
やしき男ぎのかうもじつないものかいな(九才)

(もとうた)

(本てうし)紅梅のこがれてけさは白たへの思ひ
の竹やふりつもりぞつと身もよもあられうものか
雪のはだへにはるをまつ

(かへうた)浮草のながれしだいのそのなかにこ
がれこがる螢火やぞつと身にしむ川ふく風にさ
むや肌えはうすごろも(九ウ)

(もとうた)

(本てうし)タぐれにながめ見あかぬ角田川月の
ふぜいをまつち山帆かけたね船がみゆるぞへあれ
鳥がなくとりの名のみやこに名所があるはいな

(かへうた)

(かへうた)入相になれば花さく廓のうちおくり
むかひの茶やのしゆうひやかす人が見ゆるぞへあ

れよりなんしすいた人みごとお金があるかいな」

(十才)

(もとうた)

(本てうし) あれきかしやんせ海あん寺ままた
つ田の高尾でもおよびないぞへもみぢがり

(かへうた) あれおきしやんせ四ツの たとへ
つかれがでたとてもわしがせけんへきをかねる

秀賀作 国周画(十ウ)

四 『辻占端唄』と『大よせ』

(慶応二年以前刊か。春霞楼主人編。大坂河
内屋茂兵衛・綿屋喜兵衛等版)

夫易は聖人の建る処にして強ち物を以て名状を当
る緯本儀にあらずと雖既に三国の代に官輅あり亦
我朝は阿陪清明ありて吉凶禍福を占ふ今や僕が著
す所の恋廼唄占は陳分漢の唐くさきを言ねど又大
和言葉のいとやさしき三十一文字の歌にもあらで
三筋の糸のいとほかなき都々逸の唄にて其意を知
らしめんとす是ぞ童蒙児女子等の独占ひ判断を心
で做すの便りにもと余計御世話の所業ながら書肆
の需に應じたり倘人あり心中の願事を(一才)人
に知らさでしらんとならば算木まれ銭まれにて乾
兌離震巽坎坤の八卦六十四卦を占ひ上層の唄を讀

ば善悪吉凶忽に知るべし尤下の唄は其易の変爻を
表したれば上下の意違ふべし是は口伝ありといへ
ど譬ば意中に願事ある節花の曇りの唄を聞ば乾為
天としり其唄をよみて吉凶を占ふなり故に常に一
本を懐中なさば途中にても進退を占ふに便利あり
て実に有益の一大奇書ならんと爾云

東武 春霞楼主人識 鶴亭 秀賀(一ウ)

乾为天

果報まけてまごつくよりも時をしづかに待よい
此卦は公家大名以上の貴人には吉なれども平人に
は悪し尤武士出家などには吉事と見ることもあり
万事すゝみては凶也

(本てうし) 花のくもりか遠山の雲か花かは白雪
やなかをそよそよふく春風かうき寝さそふやさゞ
波のこゝはかもめに都鳥扇びやうしのさんざめく
内やゆかしき内ぞゆかしき(二才)

坤为地

心しづかにじせつをまてば岩に矢のたつ時もある
此卦は地の徳にして万物を生養するの形なりゆへ
に人の事は世話苦勞あり願望その外相談事段々と
とゝのふべし

(同) 辻占や待間かんざし畳ざん恋といふ字にひ
かされて独り雪の夜忍んで来たに腹が立かやわし
じやとて待す心はないわいな(二ウ)
山水蒙

はじめわるくもすへよいならば手鍋さげるもいとやせぬ

此卦は童蒙の義なれば童の段々と智恵づくごとく宜きに向ふべし必ずいそぐべからず諸事了簡ちがひあるべし慎むべし

(同) わがもの思へばかるし傘の雪恋のおも荷をかたにかけ妹許行は冬の夜の川風さむく千鳥なく待身につらき置ごたつじつにやるせがないわいな(三才)

水雷屯

先にあくまでその気は有ど花にあらしの邪魔がある

此卦は草の始めて生じいまだ伸たるの意にてばんにつけその兆はあれども相談ごと願望等にも邪魔ありてとゝのはぬなり

(同) 待乳しづんでしんちのはなよおなじはなれぬ浪まくらしんに逢ふ夜は身にしみじみとこゝが苦界じやないかいな(三ウ)

水天需

胸のもやもやいつかははれて月の顔見ることもあり

此卦も急にすべからずたとへば川留にあふて居るの意におもふべし無理にわたらば怪我あるべし(二上り) 淀の川瀬のナアけしきをこゝに引てのぼるやれ三十石船カン清き流れを汲水ぐるまめく

るま毎はみなめざめさいた盃おさへてすけりや酔ふて伏見へくだまき綱よこふして所が千両松(四才)

天水訟

人の心はやぶれた屏風はなればなれの蝶つがひ

此卦は上下別々になりて相交はらざるの義背争ふの象也故に諸事とゝのひがたく心身やすからずして憂ひかなしむこと多し

(本てうし) 更てあふ夜の気ぐらうは人目をかねて格子さきたがひに見かわす顔と顔目にもつ泪袖ぬれてエ、いぢわるな火の用心はなす咄しもあとやさき(四ウ)

地水師

人のはな見ておる気になればいつかをられし我花を

此卦は大人の徳あれば忠臣孝子には吉也たとへば一人の美女を恋慕ふに大人ならば得べし小人ならばかへつて我物迄人にとらるゝの象なり

(同) おまへと一生くらすな深山のおくの侘住居縫はり仕事糸車ほそたに川の布ざらししばかる手業もいとやせぬ(五才)

水地比

はれて夫婦の盃なしてこんなうれしい事はない此卦はしたしみありて人と相和樂するの卦也故に知音朋友親るゐなどの力をそへらるゝことありて

万の望みごと叶ふなり

(同) 宇治は茶所さまさまの中にうはさの大吉山と人のきにあふ水にあふ色も香もあるすいたどしすいな浮世にやぼらしいこちやこい茶の中じやもの(五ウ)

風天小畜

たつた一重の障子じやけれどへだてられてはあいかぬる

此卦は物ごと塞りとゞむるの意あり又目に見て手にとられぬ象なれば万事急に調ひがたく常にしんくのかさなりて憂ふるすがたなり

(同) 淀の車は水ゆへまはるわたしやりんきで気がまはるほんにやるせがんいわいな実々やるせがないいわいな(六オ)

天沢履

こわいとうげをしのびてこせば今じや枕で高いびき

此卦は礼義の心あり又進むの義あり又進むの義あり始は驚くことあれど後には喜となる故にあやふけれ共破れず驚けどもやすし

(同) 今朝のナア雨にしつぽりと又居つゞけに永日を見ぢかふくらす床の内紙を引きさきまゆ毛をかくしもふしこちの人へ私のかへ名は何とせうアレ寝なんすか起なんし曙なかで暮のかね(六ウ)
地天泰

月もみつればかくるがならひらくは苦のたね苦の世界

此卦は貴人にはよし常人は悪し奢侈安逸のこゝろ樂きは??かなしみ生じ又月なかばをすたくやみをむかふの象なり

(三下り) むらさきは江戸の花かや毎度の水にあだな浮名の色そめわけていづれあやめかかきつばた(七オ)

天地否

はじめや深山のすまゐをしても末にや都の月をみる

此卦は物ごと塞りて通ぜざるかたちなれば末には榮ゆる卦なれば辛抱專一とすべしつひには志をとぐるの時あるべし

(本てうし) むつとしてかへればかどの青柳でもりしむねを春さめの又はれてゆく月のかげならばおぼろにしてほしや(七ウ)

天火同人

心清けりや末にはつひにみそこしすてゝ玉のこし

此卦は人心同じくして親み深き意にして万事正直なれば人の取立にあづかり立身出世あるべししかしその心まがれる人には大凶なり

(同) うそと誠のふたせ川だまされぬ気でだまされてすゑは野となれ山となれわしが思ひは君ゆへならば三ツ股川のふねのうち心のうちをおんさつ

し「(八才)

火天大有

朝顔のはなはきれいにさくとはいへど盛りみぢかくちりやすい

此卦は天上に有て照わたるごとく人も時を得たるなれどこれも位まけのしてすへて損失おほく苦勞あると知るべし

(同) あさがほのつゆのいのちのはかなさはほんに居るやらぬないやらひと眼見るにも目は見へずなんとこの身はせつぞいな「(八ウ)

地山謙

こんなお福とひげしておればとんだ福者に身をよする

此卦は先に屈んで後に伸るの卦也ゆへに何ごともとゝのひがたく苦勞多ししかれども身をへり下りてをれば後によきこと来る

(同) 小町おもへばてる日もくもる四位の少将がなみだ雨九十九夜さでござんしやうおほせに及ばずそりやそふでのふてかひな御所車にみすをかけたかへこちや卒とばにこしかけたア、ア、ばゝじやア「(九才)

雷地予

龍も時くりや天へものぼるわしも時きてぬしにそふ

此卦はよろこぶの義あり雷地上にふるひ出て天に

のぼるの時也万物和順して人もおもふ俛に立身出世のよろこびあり

(同) 身一ツを置どころなき胸のうちひと重の心ゆゑにときカンゆびきりかみきりやぼな気性や神々さんへおせわをかけてぬば玉の恋のやみ路じやないかいな「(九ウ)

沢雷隨

いつそこゝをば倉がへなしてぬしのきまゝな判にしな

此卦は小女長男に隨ふの意あり我動かれ悦ふまた枯木重ねて茂る卦なれば物の変りて吉ゆゑに住所をかへて利あり

(同) かねてよりくどき上手としりながらこの手がしめた唐じゆすのいつしか解て憎らしいかりてたばかくつげの櫛きつと辻占ひく計りほんにやるせわがないわいな「(十才)

山風蠱

棒ほどねがへど針ほどきかぬほんにうきよはまゝならぬ

此卦は山中に風を含みて吹出し懐るの意にして諸事につきて難義迷惑する事ありゆゑにすべての願望叶ひがたし

(同) おきてみつ寝てみつまでどたよりなく蚊屋の広さにたゞひとり蚊をやく火よりむねの火のもゆる思ひをさつしやんせ「(十ウ)

地沢臨

とかく女は柔和になしてほれたと見せずにはれし
やんせ

此卦は貴賤相交りて親むの義なり故に物事柔和に
して吉別気なる事あしし横合より難渋なと言かけ
らるゝ事あるべし

(二上り) 春雨にしつぼりぬるゝ鶯の羽風に匂ふ
むめが香の花にたはむれしほらしや小鳥でさへも
一すぢにねぐらさだむる木はひとつわたしや鶯ぬ
しは梅やがてきまゝ身まゝになるならばおう宿梅
じやないかいなサツサ何でもよいわいな(十一才)

風地観
おもひがけなき雨にはあへどはれてことなき夏の
空

此卦は晴天に雲の起るごとく思ひ寄ぬこといでき
て苦勞あるべし然れどもその雲を風の吹はらへば
さらに障りなし

(本てうし) おもひをばしらかみにかくふでのさ
き毛ほどおもはぬぬしさんになをますかゞみくも
らんといふたがむりじやないかいなア、さんやれ(

十一ウ)

火雷噬嗑

はるの泡雪とくるも早き夫婦げんくわの閨の中
此卦は頤の中に物あるの意にして障りあれどもか
み合せて通ずるの義あれば始め調ひがたくとも後

には調ふべし

(本てうし) 羽織かくして袖引とめてどふでもけ
ふはゆかんすかといひツ、立てれんじ窓せうじほ
そめに引あけてそれ見やしやんせこの雪に(十二
才)

山火賁

ぞつとするよな器量のうへにしききせたら猶よ
かる

此卦は虎の林を出て遊ぶの象なれば物のうるはし
く又威あるの意なり立身出世あるべし諸の願ひ叶
ふべししかしよくかわくへからず

(同) ほんに思へばきのふけふ月日立のもうはの
そら人のそしりもよのぎりも思はぬ恋のみつせ川
あはぬその日はきにかゝるあへば口舌のたねとな
る憎らしいほどかわゆふて正正わしが心はなんか
じややら(十二ウ)

山地剝

仏いぢりをさらりとやめてけふより精進おちまし
た

此卦は枯木の栄花を発するの卦なれば今より新規
に物を取始むるによろし然れども高きより落たる
象あれば人も身の上安堵ならず

(同) くぜつして思はせぶりなそらねいり奥のざ
しきのつめびぎがつひなかだちでそれなりにみだ
るゝ髪につげの櫛八まん鐘のきぬぎぬにわかれと

もなやおくり船」(十三才)

地雷復

たとへ一度ははづるゝとても思ふ的ならばづしやせぬ

此卦は家を破りふたゝび復すの意なれば一度は悪くとも重ねては吉事に向ひ諸事おもふところを成就すべし

(同) 梅がぬしなら柳がわたし中のよいかすねるのかある夜ひそかに山の月こゝろないぞへ小夜あらし」(十三ウ)

天雷无妄

玉も包めば光りがしれぬぬしもこゝろをあかしやんせ

此卦は石中に玉をつゝむの卦なれば諸願叶ひがたし時の至らざると知るべししかし己が欲にせざる事なれば願ひ叶ふべし

(同) 一ト声は月がないたか時鳥いつしかしらむみぢか夜にまだ寝もたらぬ手枕や男心はむごらしいカン女子心はそふじやないかた時あはねばよくよとぐちな心で鳴てばつかりあるわいな」(十四才)

山天大畜

水は下へとながるゝものを上へ船やりや逆となる此卦は乾良あい逆するかたちにて住居常にあんおんならずふだん心中にいかりをふくみ恨みをおも

ふゆゑ安気ならざる義なり

(同) 葉桜やまどをあくれば山時鳥カン又も鳴かとまつうちにかつをかつをヲヤいさみじやとんと出る浮気生ではないかいな」(十四ウ)

山雷頤

雪をかきわけ桜はさかぬとかく時節を待がよい

此卦は養ふ義にして物の成就する卦なれどもしかし時節の未はやき意あり急にすることはよろしからず

(同) 書おくる文もしどなき神奈川でだいて寝よとの沖こへて岩にせかるゝちる浪の雪かみぞれかみぞれか雪かとけて浪路の二ツ文字つまを恋しと慕ふてくらすす」(十五才)

沢風大過

きれた凧ではわしやなければもちうにまよひておるわいな

此卦は棟撓のかたちなり上ずることならず下載ることならず中に迷ふの意なり故に何事も不定にして思慮やすからぬなり

すいな浮世を恋ゆへにやぼに暮すも心がら梅が香そゆる春風に二枚屏風をおしへだて朧月夜の薄あかりしのびしのびてあいぼれのくぜつの床のなみだ雨いけの蛙も夜もすがらしになくではないかいな」(十五ウ)

坎為水

男心は紫陽花よいつと定めも花の色

此卦は難義困窮の卦にて二人水に溺るゝの象なれば遠く住所を去てよし常にかわる怪しき意有と知るべし

(同) ぬば玉のやみとおまへにのぼりつめ二階せかれてしのびあふ夜るは夢さへくるぬりの枕ことばじやないかいな」(十六才)

離為火

はつと立たるあの村千鳥風のまにまにわかれゆく

此卦は離別の卦なれば親子兄弟或ひはしたしき朋友などに別れ遠ざかるなり然れども学者出家などには大吉なるべし

(同) 秋の夜はながいものとはまん丸な月見ぬ人の心かも更て待どもこぬ人の音づるものはかねばかり中力かぞふる指のねつおきつわしやてらされて居るわいな」(十六才)

沢山咸

寝ごみへ持こむこの牡丹餅はほんにうれしい口果報

此卦は感通して物の速に調ふの卦なり故に思はざる吉事ありて万の願望万事向ふより深切に世話してくるゝなり

(同) 萩きゝやうなかに玉章しのばせて月を野末に草の露君をまつ虫夜毎にすだく更行かねに雁の声こひはこふしたものかいな」(十七才)

雷風恒

風に吹ちるあの紅葉はどこへよるべきあてもない此卦は物の散失するの意あればあつまると思へばちり散と思へば又集るゆへ更に定まらぬ也住所につきとかく苦勞ありと知るべし

(三下り) 十日彘びすの売ものはばせぶくろにとりばち銭がます小ばんに金ばこ立彘ぼしゆではすさいづちたばねのしおさゝをかついで千鳥あし」(十七才)

雷天大壮

虎に角ありやいひぶんないがそれじややつぱりがいになる

この卦は陽気さかんにして壮はすなはちさかんなれども花ありて実なきがごとく大吉に似て吉にあらず金銀財宝にくらつあり

(本てうし) 世の中のいきなせかいを今こゝで八幡さまの山びらきさゝがこふじてつい夫なりにざこ寝のまくらかりそめにヲヤすかねへあけのかね」(十八才)

天山遯

いつそ深山にかくれてゐたらこんな苦勞をしやせまい

この卦は退くよみ住所などについて辛苦多く思慮ふんべつも定まらず諸事間違ひのある卦なり願望は邪魔するものあり

(本てうし)しのぶこひぢはさてはかなさよこんどあふのがいのちがけよごすなんだのおしろいもそのかほかくすむりなさけ」(十八ウ)

火地晋

ぬしとわたしは朝日の症で昇りかけては下りはせぬ

此卦は日の地上に出るの象ありて次第次第にはん昌して立身出世におもむく意あり又人より親み敬まはれ上たる人の恵みにあふべし

(同)風ひいて道も中カンたへなん雪のに夜半こぬがましぞとあきらめて酒の相手にうたゝ寝の積るうらみも宵のうち思ひやつたがよいわいな」(十九才)

地火明夷

三世相にもよくあるやつよ始めわろくてのちはよい

此卦は日の地中にありて分明ならざるの意あれば始めは思ふ処をうしなひ難義をすれど後には栄花の身ともなるべし

(同)志賀のからさき一ツ松夜ごと夜ごとの泊り烏がむれくるをあをあをとうれしなみだのかわく間もくもりがちなる夜の雨」(十九ウ)

風火家人

世帯の車は女の事よ糸をとる気でよくまはす

此卦は家内安寧するの卦也万事によること婦人以

てすれば吉なりしかしながら当世の人かくのごとくなる女少し大に撰ぶべし

(同)いろ気ないとて苦にせまいものしづが伏屋に月がさす見やればらにも花がさく田植もどり袖つまひかれ今宵逢ふとめづかひにまねぐあいつの小むろぶし薄に残る露の玉かしくと読だがむりかいな」(二十才)

火沢睽(日+癸)

しん気辛苦の種時ながらとかく宝の芽を出さぬ

此卦は人心相そむきて万事ことなりがたし故に人中辛苦多く又財宝散乱することありしかし学者などには大吉ありとす

(同)浮名たてじと口さきでわざとけなしてある時はむねでのろけて知らぬ顔噂するさへなかぬとはほんにうるさい人の口」(二十ウ)

水山蹇

あきが来たとて梢の蝉もほんに朝ばんなきあかす此卦は寒中に蝉風をかなしむの意にして又龍の玉をうしなふの象也ゆへに宝さんざいして甚しく貧苦にせまるの卦なり

(二上り)わしが国さで見せたいものはむかしや谷風いまだてもやうゆかしなつかし宮城野しのぶうかれまいぞへ松しまおどりしよんがへ」(二十一才)

雷水解

やつと苦界のかどとび出してそらに羽をのすはなし鳥

この卦は魚の網を遁れ出たるの意にてなやみ解ちるなり故に難義なる所をのがれ出る卦なりしかれども慎まざれば再び災あり

(本てうし) ゆきはともへにふりしきるびやうぶが恋の中立でてうど千鳥の三ツぶとん元木にかへるねぐら鳥まだ口あをいじやないかいな(二十一ウ)

山沢損

勘定づくには浮世はいかぬ損して徳とることもある

此卦はもと減少とて物の損失ある卦なれども却て宜とする象あれば後にいたりて利徳をうるか又誉れあるか末よき卦也

(同) 風さそふ音と思へどもしやまたおもはせぶりに忍ばるゝ心の内のしんのやみ飛立ほどに思ふのをしらぬふりして見てもどうも寝られぬ恋のくせ(二十二オ)

風雷益

みづがうごけば船までうごくほんにあぶない浪のうへ

此卦は上下とも動きてしづかならず故に住所やすからず心身定まらず辛苦ありて思ひよらざる損毛有慎むべし

(同) たつ田川辺に船とめてまだうらわかき娘気のどふいふてよかるやらしんきまくらのそら寝いり(二十二ウ)

沢天夬

床にすへたるあの芥子の花そつとおかねば花がち

此卦は剛強に過るの卦なれば性急にして万事やぶるゝなれば慎むべし故に人は堪忍柔和をむねとしてかりにも情をおもふべし

(三下り)

夕立や田を見めぐりの神ならばかさい太郎のあらひごひさゝがこふじて狐けんほんにぜんせなことじやエほりの船やどたけやの人とよぶこ鳥(二十三オ)

天風姤(女+后)

やつとあつめしあの落葉をば風がおとして吹とばす

此卦は物のあつまると散うせる象ありて定りなきぎなれば人も分別工風さだまらずして迷ふ也又おもひ寄らずあひあふの意あり

(本てうし) 宵のまち夜なかはこがれあくるころせめて夢にとひぢまくらあれ耳やかましい鶏の声ほんにしんきな事じやいな(二十三ウ)

沢地萃

人のあつまる両国ばしは常にけんくわのたへはせぬ

此卦は物の集会してはん昌するの意なり故に又争論障り常にあれば慎むべし願望かなふべし婦人のさまたげすることあるべし

(同) 恋すてふ身は浮舟のやるせななきなみの夜々いさり火のもゆる思ひのくるしさにきゆる命もさつさんせよを宇治川の網代木やみづにせかれてゐるわいな」(二十四才)

地風升

もとは二葉の芽ばへだけれど家となるやうに木にもなる

此卦は草木の地中に有て次第次第に地上に発生する意なれば段々と立身出世をすべし

(同) 名にしおふ富士とつくばの山合につゆのなさけのひと夜づま色もほのめくちくさの里へ人めの関をしのびツ、木の間がくれにあふ夜さは水にすみだの月もいや」(二十四才)

沢水困

わしが思ひは百分が一もぬしのかたへは通ふじやせぬ

此卦はこんきう難義の卦にして諸事ふじゆうに我こゝろざし人に通達せず苦勞多き卦也

(三下り) さくら見よとて名をつけてまづ朝ざくら夕桜よは夜ざくらとたれもしるぞかしエ、エ、どうなと首尾してあはしやんせなん時じやひけ過じやたそやあんどふちらりほらり鉄棒ひく」(二十

五才)

水風井

もと木にまされるうら木はないに心うごかす事はない

此卦は万事あらためかへることよろしからず各あたりまへの職分をつとめみだりに新規の事にとりかゝる事なかれ損ありて益なし

(同) 月あかり見ればおぼろの船のうちあだな二上りつめびきはしのびあふ夜の首尾の松」(二十五才)

沢火革

うしを馬ならのりかへしやんせ願ひかなはぬ事はない

此卦は万事改むるによし今迄なすことに益なければ速にそのふるきを捨て新しきにつつるべし願望障りあれどもとゝのふべし

(本てうし) 永き夜の永き夜のとふのねふりのみなめざめ浪のり船のおとのよきかな下からよんでも永きよのとふのねふりのみなめざめなみのりふねの音のよきかな正月二日のはつゆめに」(二十六才)

火風鼎

ふゆの氷と心がとけぬそこで口舌がたへはせぬ

此卦は常に口舌のたへぬ卦なれば慎むべしゆへに願望思ふまゝに叶はずして病ひの変あるべし是お

そるゝとやぶるの意あれば也

(同) 朝顔につるべとらにれてもの思ひ人の心と淀のみづはや明ちかき鳥羽のふねもやいはなれし
鶯かづら声もやさしき田うへうた(二十六ウ)

震為雷

声はなしても姿を見せぬ雲間がくれのほとゝぎす

此卦は声ありて形なきの卦なれば祥福ありてはん
昌の象なれども大てい平人にはよろしからず位ま
けすることあるべし

(同) 金時が金時が熊をふまへてまさかりよもつ
てふじや裾野のまつばやし義経弁慶渡辺の綱から
の大将あやまらせ神功皇后武内の臣いくさ人形よ
しあしちまきせうぶ刀やあやめ草(二十七オ)

艮為山

そこは土腐だに用心しやんせ跡へかへれば怪我は
ない

此卦は止るによるしく進むに損あり憂喜の山重な
りたる義とす故に物ごと半は調ひ半は通達すべし
(二上り) 松はからさき時雨はとまや月の名所は
すまあかし雪はこしぢかな久方夜のおくれればよい
よいよあれはさて是はさてな(二十七ウ)

風山漸

野辺にはへたるあの若松もすへにや枝葉の生茂る
此卦は山上に木をかへて茂生するの意にて立身出
世あるべし又女の男を思ふの卦なるゆへ婚姻とゝ

のふべし

(本てうし) 雪の夜のつめたさにあれ小ざしきの
ふたりづれたがいじらす合ことばほつれかうし
あらひがみ丑ゝもふじれつたいかみやうじ(二十
八オ)

雷沢帰妹

おもひ願ひはみな違ひ棚床のすへものわしやいや
じや

此卦は不意にまちがひの有卦なれば慎むべしまた
色情はつきて苦勞あり且願望さまたげあり

(同) 浅くとも清きながれのかきつばたとんでゆ
ききのあみがさをのぞいてきたかぬれ乙鳥かほが
見たふはないかいな(二十八ウ)

雷火豊

水にうつれるあの月影はめには見るのみにて手に
とれぬ

此卦は盛大の勢ひある卦なり然れ共余り大すぎて
却つてそのかたちを失ふたとへば水中の月のごと
く目に見て手に取れぬ意なり

(同) 和歌の浦には名所がござる一に権現二に玉
津島中カン三に下り松四に塩はまよあまの橋だて
切戸の文珠もんじゆさんはよけれどもきれると
いふ字がきにかゝるさつさなんとせうかどせうぞ
いな(二十九オ)

火山旅

花もつばみが匂ひはふかいひらきすぎては曲がな
い
此卦は始めよろしく後わるし万事に付つゝしむべ
し又月の半出たる意あれば少事はよしその心にて
占ふべし

(同) 恋し恋しがついしやくとなるむねにさしこ
む窓の月今やくるかとまつ身はしらでまたぬひと
こゑ時鳥「(二十九ウ)

巽為風

あたる矢さきを風ゆへそれで思はぬ苦勞もするわ
いな

此卦は通達の意ありておもふことを遂るの卦あれ
ど横合より思ひよらぬ障りありて事を仕そんずる
事有べし

(二上り) 竹になりたやしちく竹もとは尺八中は
ふへすゑはそもじの筆のじく思ひまいらせそるか
しくそれそれそふじやへ「(三十才)

兌為沢

こゝろはやしやでも菩薩でも顔にたれしも迷ふは
むりもない

此卦はよろこびの顯はるゝ卦にしてよき卦なれど
も物事取しまりなく埒あかぬ意あり外見はよく内
心よからぬの意あり

(同) 月夜烏にふと目を覚しあいたさじれつたさ
にむりなこといふてわしや神いぢりあいたい病は

疴症のせい酒でしのがんせ苦の世界じゃ「(三十
ウ)

風水渙

うきくさのはなはきれいにさいてはあれど風のふ
くたびみだれあふ

此卦は物のちりとくるの意ありて悪事の身を離る
ゝの吉兆とす然れどもちりみだるゝ義あれば損失
あるべし

(本てうし) 玉川の水にさらせし雪のはだつもる
口舌のそのうちにとけし島田のもつれ髪思ひ出さ
ずに忘れずにまたくる春を待ぞへ「(三十一才)

水沢節

小さな石でも邪魔するとき大きな車もうごきや
せぬ

此卦は物事滞りてさはりある卦也ゆへに運つたな
くとぢふさがる象にて万の願望叶ひがたきと知る
べし

(同) 柳ばしから小舟でいそがせさん谷ぼり土手
の夜風がぞつと身にしむ衣紋ざか君を思へばあは
ぬ昔がましぞかしかたかたけふはござんせとさう
いふ初音をきゝにきた「(三十一ウ)

風沢中孚

おのが心を善悪ともに鏡につつして見やしやんせ
此卦は誠あるの卦にして心中正直ていねいなれば
吉とす我邪の心あれば大凶にして目前にばつある

べし

登り下りのおつゞら馬よさても美事な手綱ぞめか
いな馬士衆のくせか高声で鈴をたよりに小むるぶ
しさかはてるてるすゞかはくもるあいの土山あめ
がふる」(三十二才)

雷山小過

ひとつ叶へば二ツのふそくほんにねがひはたへは
せぬ

此卦は物の十分にみてんとすれば又不足のことを
発し調ひがたき卦也しかし大きな災なけれども
つねに苦勞あるべし

(二上り)月の八日はお薬師さまよやくし参りの
下向道でちらと見そめし大ふり袖ようせばんに
はしのばにやならぬしのびそこねてもしあらはれ
て永い刀でちよんぎらりよとまよ」(三十二ウ)

水火既濟

おもひみだるゝ風の野のすゝきとくとかれぬ胸
のあや

此卦は物の乱るゝ始めとす故に一旦は成就すると
も末には破るゝ也色情の事に苦勞あるべし慎むべ
し

(同)としまざかりの初寅まいりしのぶづきんの
つい見しられてじみな小袖のかくしうらこぼれま
つ葉の幾千代もはなれぬなかのたのしみは太平樂
で世をおくるヨゝよいことよ」(三十三

才)

水火未濟

なんぼきれいな花びらとても落たうへにて実をむ
すぶ

此卦は物の成就する卦なり然れどもいまだ用をな
さずといへど後相まじはることを吉兆とするゆへ
に願望とゝのふべし

(本てうし)むらさきのむすびめかたきえんの糸
解ぬも色の深みどりまつにこぬ世は筆のさき恨み
重ねし命毛も硯の海にはまるほどふかいあさいは
客と問夫くらうするのもおとこゆへ」(三十三ウ)

九曜星の吉凶の事

日曜星
風をうけたるあの帆懸ぶねおもひどふりにのして
ゆく

此星にあたる年は万よくして家業はんじやうすべ
ししかしゆだんをすれば損あり

(同)はる風にむめがかほれば君をまつこゝろの
たけをうれしさにカンはずねのゆめを身にそへて
アレにくらしい明のかね」(三十四才)

月曜星

旅もするもの思はぬ所で金の弦をばほりあてる

此星にあたるとしは万事よし他国して仕あは
せよく思ひよらざる幸を得る事あるべし

(二上り)越後の国の角兵へ獅子国を出る時は親

子づれしゝをかぶつてひつくりかへつてちよいと
きまりますおやぢアまじめでふへをふく」(三十四
ウ)

羅喉星

せんじつめたる薬のやくわんみがきあげても光り
やせぬ

此星にあたる年は大いに悪く財宝をそんするか又
は病難あるか親るい他人の殊によりて辛苦あるか
なり

(本てうし)色の名をいはぬいはぬと山ぶきのな
びくといふもすいの中水に流すがわしや気にかゝ
るカンなにをかはずかくどくどとほんに女子とい
ふものはやるせないものではござんすわいな」(三
十五才)

土曜星

さきのきれたる筈じやないがはかなき此身のさつ
しやんせ

此星にあたる年は万事よろしからず望みごと願ひ
事何ごともし一切かなはぬ年なれば慎むべし

(二上り)王子さんへはわしや月参りむりな願ひ
もがんかけてきつねのしばらく矢の根五郎むぎこ
がしにとりさしでちよいとさした」(三十五ウ)

水曜星

ぐるりぐるりとまはりておれば氷るひまなき水車
此星にあたる年は先よしといへどもその職におこ

たるときは悪しゆへに随分精をいだせばよろこび
ごとかさなるべし

(三下り)わがこひはすみよしうらの気色にてた
ゞあをあをとまつばかりこれがこひかやなさけな
や」(三十六才)

金曜星

若葉のうちをばだいにすればすへにや枝葉のお
ひしげる

此星にあたる年は春のうちはあしく親るいか父母
にはなるゝことあれどしんじんすればよろこびこ
と重なるべし

(本てうし)幾夜さかぬしにあはぢのしま田わけ
波のまくらにねみだれてないて明石のうらちどり
せめてゆめぢにかよへかし」(三十六ウ)

火曜星

江の嶋細工のびやうぶぢやないがばらばらはなる
ゝ春の雨

此星にあたる年はよろしからずおや兄弟親ぞくに
はなれることあるべしさもなきときは金銀財宝を
そん失なすべし

(本てうし)おなじことふたゝびかゝせたわびの
ほとゝぎすしんきからすがをつになくときはねづ
みなきしてつけこたへ」(三十七才)

計都星

水かさまさりしあの泪川わたりかねたる世のたつ

き
此星にあたる年は万事大いに悪し泪のかわく間あるべからず尤夏のうちは別して悪しといへども秋より少しはよし

(同) はる風にふきまはされし小てふさへつがひはなれぬ女夫中なのはにちぎる心ねをかぜがじやまして袖やたもとのあやとなる」(三十七ウ)

木曜星
かさねがさねのめでたい事にかさねがさねの酒をのむ

此星にあたる年は万よしとへば春にあふて木の芽をいだすがごとく次第にうんのひらきて幸をかさぬべし

(本てうし) 川かぜにいとふすだれをはねあげておもはずかほを見あはせて吾つまどりの丑、丑、モしんきなみやことどり」(三十八才)

生れ性十枝の吉凶

奇光枝 きのえのとし

おもふことかなふ福介打出の小づちおかめに見てさへ楽隠居

此枝に生るゝ人はわかきときはひんなれども段々と思ふごとくになりて末には大いなる福德を得べし

(本てうし) 京の人みやこ詞とじまんがおかし男のくせになんじややらさふじやさかいのいきんか

のけたいなやつじやほたいがのすこひこそよまのろく女なりけり都鳥ありやなしやの角田川洗ふてみたい江戸の水」(三十八ウ)

金財枝 きのとのとし

行末は海となるまべき谷水なれどしばしこの葉の下をゆく

此枝に生るゝ人はわかきときはおもひごとたへず人にあたまをおさるゝなれど次第に出世をなして大海のひろきへ出べし

(同) きぬぎぬのわかれにそらも雨さそふ蝉と蛩とはかりにかけてないて別りよかこがれてのきよかア昔おもへばみづしらず」(三十九才)

千歳枝 ひのへのとし

もとは裾野をとふりて来たがのぼりますぞへふじの山

此枝に生るゝ人は段々富貴にいたり官にすゝむの相ありてつねに目上の人に愛せらるゝゆへ引立にあづかり出世をなすべし

(三下り) ひけ過や主をかへしてたゞくよくよと宵のうつり香さめやらぬまくらにひゞくかねの音に二階をまはらツしやりませ鉄棒引」(三十九ウ)

銀宝枝 ひのとのとし

かぜに羽をのすあのいかのぼり糸のひきてのあるゆへに

此枝に生るゝ人は前に同じく貴人高位のてうあい

にあづかり段々と幸を得べし信心うすき人は苦勞
あると知るべし

(二上り)ぞめきにごんせ島ばらへ小野の道風じ
やなけれどもかわずに柳を見てくらす(四十才)

散高枝 つちのへのとし
萍のしかとところはさだめぬけれど花もさくなり
実もむすぶ

此枝に生るゝ人は田畑にえんあるといへども常に
住所につきてもの言たへず苦勞ありしかし財室に
えんありて十方よりあつまるべし

(本てうし)わしが在所は京の片辺り矢背や小原
に牛ひいて柴打ばんにせうぎあたまへちよいとの
せて黒木かはんせんかいな栗かはんせんかいな
又、又、かはしやんせんかいな(四十ウ)

天高枝 つちのへのとし

うめと桜は一時にさかめ咲ぬはづだよ時がある

此枝に生るゝ人は無口にして空言をいはず福分あ
りて命ながしといへども子なし若子あるときは福
分ありといへども老てまづしくなるべし

(同)あふたびにいとしかたのつれなさは金毘
羅さんもしらぬかほ千里のみちもなんのそのいと
はでまはる虎の門ほんにやるせがないわいな(四
十一才)

五柳枝 かのへのとし

猪しゝむしやともいふならいやれ義を見てうしろ

は見せはせぬ

此枝に生るゝ人は上べは心しづかにして下心はは
げしく学文に心ざしあり但し短氣にて財宝身につ
かねど義を見てはあとへ引ぬ性なり

(同)空も長閑に花見のつれは船のり出すむかふ
嶋土手にあれちらちらと散るわいな(四十一ウ)

虚部枝 かのへのとし
所がへしてすゞめじやさへもひなをそだつる親鳥
のおん

此枝に生るゝ人は正直なれども心たけくおやに不
孝なるべしゆへに住所をかゆるのなやみあり孝な
らばよし

(二上り)きみは今ごろこまがたあたりないてあ
かせし山ほととぎす月のかほ見りや思ひ出す(四
十二才)

豊陽枝 みづのへのとし

人はなにともしはまのつゝじこちは春くるときを
まつ

此枝に生るゝ人は心しづかに時節をまつべし思ひ
よらぬさいはひにあふべしとかくに剛氣のことを
慎むときは大いによし

(三下り)臯月さみだれよもぎに菖蒲わたしやお
まへののぼりぎほ又、もほれりやしよことがない
わいな(四十二ウ)

柳復枝 みづのへのとし

たとへおふくと笑はゞわらへみめより心がしんの玉

この枝に生るゝ人は心正しけれども人のそねみをうくべし殊に女はみめかたちうるはしくして妬をうけ大難にあふべししんじんをなすべし

(本てうし) 竹にすゞめはしなよくとまるさてとまらぬは色の道わたしばかりが情たてゝおもふおかたのつらにくやよいよいよいやさそれへ(四十三才)

十二支生れ年吉凶

子年 坎中連

三味線のどうせはなれる二人がなかはきれた糸ならかけかへる

此年に生るゝ人は衣食にえんありて常にしづかなることをこのむ性也しかしふうふのえん薄くはじめの縁かはるべし

(同) 秋の夜ながにぬしにあふ夜のみぢかさよ月よ鳥がなくわいな月じやごんせぬしらじらとあけのかね(四十三才)

丑年 艮上連

はしめ大きく中たびへこみ末にやふくれるなりひさご

此年に生るゝ人は身上はじめはよく中ごろ悪くなり年よりて又仕あはせよくふつきはんじやうなるべしもつとも此人はちえかしこき生れなり

(同) すだれおろした船のうち顔は見へねど羽織の紋はたしかおぼへの三ツがしはよんでちがはゞどうせうと跡とさきとにこゝろがまよふ丑、丑、丑、もじれつたいふねのうち(四十四才)

寅年 艮上連

からみついたる毒草とても秋の末にはうらがれる此年に生るゝ人はさいなんおゝくしてその身わづらひたゝるべししかれども三十過てより段々と仕あはせよく財ほうにえん有べし

(本てうし) 紀伊の国は音なし川の水上に立せ給ふは船玉山ふな玉十二社大明神さて東国に至りては玉姫いなりが三囲へ狐の嫁入お荷物をかづくは合力いなりさまカンのたのめば田町の袖すりもさしづめ今宵は待女郎仲人は真崎まつ黒なくる助いなりにつまゝれて子迄なしたる信田づま(四十四才)

卯年 震下連

梅よ桜よ柳よ桃とさつは両手にもてはせぬ

此年に生るゝ人はちえさいかくありといへども余り諸芸をならふ事多くしてとげがたしもつとも財宝にえんあるべし

(三下り) 私が思ひは三国一ふじの深山のしら雪つもりやするとも解はせぬうき名たつかやたつかや浮名あんなおかたといはんすけれど人の心はいえんきえんほんに命もやるきになつたはいな(四十五才)

辰年 巽下断

文字にかいても身をたつものしのぼりますぞへ雲までも

此年に生るゝ人はちえかしくくともほうばいの中ねんごろにして段々と立身出世をなすべししかし女房のえん薄くたびたびかはるべし

(三下り) ころはとこなつみぢか夜にくぜつのまゝのむかひかごころがのこるわかれぢにどくとしりつゝちやわん酒とめずとのませてくださいんせ(四十五ウ)

巳年 巽下断

一升つまらぬ五合のうつわひろくもたんせ心もち此年に生るゝ人はこゝろちいさくして常におもひごとたへず又人をそしりねたむ性なりこれ前生は女人なりしゆへ業ふかければなり

(本てうし) 露はをばなとねたといふ尾花はつゆとねぬといふアレねたといふねぬといふをばなが穂に出てあらはれた(四十六才)

午年 離中断

千両の鷹もそのばで放して見ねば芸のよしあしわかりやせぬ

此年に生るゝ人はとかく父母の愛あつくしてその手元をはなれざれども却つてたゝることあるべし別に家やしきをもちてよし

(本てうし) あちなことからついほれすぎてそこ

の神さま仏さんかなはぬ恋もかながきことづてにまかせるたよりあはれぬつらさに又のむ酒はあたゝめもせであをりつけそのまゝそこへじれふしてふと目がさめりや火の用心さつしやりませふ(四十六ウ)

未年 坤皆断

かねの宝はつみおくとても金でかはれぬ子の宝此年に生るゝ人は前生にも命を多くとりたるむくひにて今生にては子のえんうすくたゝるべししかし財宝はみちたるべし

(本てうし) すゞりひきよせかくふみのあいたいがいる見たいがやまひこいしこいしがさしこんでおせどさがらぬしやくつかへ(四十七才)

申年 坤皆断

質屋のばんとうくどくにさへも言葉おゝきは品がない
此年に生るゝ人はつねにことば多きさがゆへしそんずることありつゝしむべし又たび他こくをかけたまはり辛勞することあるべし

(本てうし) あふた夜のよひはさはぎてまぎれて居たがふけてくるほどしんしんともはや時刻とまつ辻占にごんとついたる鐘の音にもしへおかごがまいりましたエ、エ、しんきななごやさんんたまたまあふのにしりもせで(四十七ウ)

酉年 兌上断

道の真中にはへたる草はあたまあげるとふられま
す

此年に生るゝ人はとかくにうんをおさへらるゝか
たちありて若年のうちはくらうたへずかつ親兄弟
にえんうすけれどちえ才かくはあるべし

(同) ほとゝぎすねぐらさだめぬたゞうかうかと
月にうかるゝそのふぜいはしまにふねのにぎはし
く小べりにしゆすのそらどけはしめぬがむりかへ
(四十八才)

戌年 乾皆連

小川ながるゝ落葉を見なようきつしづみつ海へ出
る

此年に生るゝ人は若年のうちはたびたびうきしづ
みありて苦労あれどもすゑには大海へ出しごとく
立身出世をなすべし

(本てうし) 蝙蝠が出てきてはまの夕すゞみ川風
さつとふくぼたんからい仕かけの色男いなさぬい
なさぬいつまでもなにはのみづにうつすすがた絵
(四十八ウ)

亥年 乾皆断

瓜の種まきなすびははへぬあくのむくひにぜんは
ない

此年に生るゝ人は前生に善根をまきしゆへその徳
にて今生にても衣食にことをかゝずまんぞくなり
又手のげいありて財あつまるべし

(二上り) やよげにも心意気の花の兄曾我中村の
祐成と芝居富貴と咲牡丹コリヤまたなんのこつち
やいなんすかおかへりなんすかまちなんせもそつ
とこゝに助六と時むねをつく廓の気を眼とめのわ
かれはなの雨」(四十九才)

五性の善悪

木 東の方 青色 歳星

のぼるあさひのいきほひつよく四方にひかりをし
くわいな

此性にうまるゝ人は朝日の昇るいきほひありて誠
にめでたく時めくべし尤万事ひかへめにすべし

(三下り) 富士や浅間のけぶりはおるか衛土のた
く火はさわべのほたるやくやもしほで身をこがす
さうじやいな相えんきえんはあじなものかたとき
忘るゝひまもなくいつせつからだもやるきになつ
たわいなエ、おかたじけ」(四十九ウ)

火 南の方 赤色 熒惑星

赤いしかけはめにつくけれどさのみうまみはあり
やせまい

此性は生るゝ人はめのうへの人の引立にあづかる
といへどつひにはわかるゝ事あればつゝしむべし
親兄弟に縁うすし

(本てうし) 辻君のたへぬながれの思ひ川こひに
はほそる柳かげしばしとめたき三日の月カクし
の胸さへさよあらしさりととけし洗ひがみ結ん

できよき水の音「(五十才)

土 中央 黄色 鎮星

道もまん中とふりておればどぶへおつべきわけがない

此性にうまるゝ人は万事ひかへめにして何事も中道をゆけば大いによし少しにてもこゝろにゆだんなさば大なるわざはひにあふべし

(三下り) よざくらやうかれ鳥のまいまいとはなの小かげにたれやらがあるわいなとほけさんすなめぶきやなぎがかぜにもまれてふうわりふうわりとさふかいなさふじやいな「(五十ウ)

金 西の方 白色 太白星

月もみつればかけるがならひ山ものぼればくだらんせ

此性に生るゝ人はあまりうんよくして一時に出世をなすといへど極まりありて又段々とあとへもどるなればかならず油断すべからず

(本てうし) あさがほにつるべとられてもの思ひ人のこゝろと淀の水はやあけちかきとばのふねもやいはなれしつたかづらこゑもやさしき田うへうた「(五十一才)

水 北の方 黒色 辰星

花はさくとも深山のさくら人の見られぬ口おしき此性にうまるゝ人はちえ才かくありといへど人の見だしにあづからず一生うもれてくらすべしこれ

あまりそのこゝろのいんきなればなり

(本てうし) しぐれふるあさぢが原の夕ぐれに二声三こゑかりがねのたよりにまつ身のうやつらやこひのうきはしななたへてやるせなみだやもつれ髪いふにいはいはれぬ胸のうち思ひやつたがよいわいな「(五十一ウ)

発行書林

大阪

河内屋茂兵衛

綿 屋喜兵衛

出雲寺萬次郎

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

小 林新兵衛

英 大 助

須原屋伊 八

岡田屋嘉 七

和泉屋市兵衛

丁子屋平兵衛

山崎屋清 七

山口屋藤兵衛「(裏見返し)